

この号から、「相中相高百年史」の中村高等女学校関係の“思い出の記”等を転載します。

思 い 出 (※1)

第1回卒 佐藤 ちよ (※2)

大正 10 (※3) 年中村第二小学校 (女) の裁縫室に高等科を卒業した人が入学する為に開設された補習科として始まったもので、裁縫を習いたくて高等科卒業前に入って来た人もいたので歳の大きい人もいた。中村町や各村部から 60~70 人位の人が 2 教室に分かれていた。当時第 1 回生は中村第一小学校 (男) の学校の講堂を 2 つに仕切って勉強していた。

北町の実践女学校の校舎には、県立相馬女子校が入っていたが大正 11 (※4) 年に現在地の大手先の校舎が落成して移転した。その空いた校舎に、先ず校舎新築中の中村第二小学校 (女) の子供達が仮住まいをしていた。

いよいよ大正 12 (※5) 年 4 月 1 日に男の小学校で勉強していた私達 1 回生と 2 回生が北町の学校に移って授業が始まった。当時県立女学校の生徒は袴に白線 1 本入っており、私たち町立女学校の袴には白線 2 本入っていた。校長先生は前川三省先生で、まわりの人達は、「十銭。」「十銭。」というので嫌だった。私はお裁縫を習いたくて入学したので気にもせず学業に精を出した。

和裁 (4 時間) 木村先生・菅野先生・橋本先生だった。その外は珠算・音楽・体操・修身の勉強をしたが、主に第二小学校 (女) の先生が指導にお出でになった。

裁縫第 2 学年の教材は 1 学期 12・2 学期 9・3 学期 7 の教材を習った。その主な細目は

- (1) 本裁 (男裕半襦袢・男裕長襦袢)
- (2) 女物 (学衣合羽・女物裕道行)
- (3) 絹布 (単衣女物・単衣男物)
- (4) 毛織物 (女物単衣・男物単衣)
- (5) 被布・男帯
- (6) エプロン・ボンネット・ズボン下・サル股・男もも引等々

研究科も出来たが入らないで家事手伝いに入り、当時は衣生活には事欠かないで、殆ど着物を縫う事が出来るようになっていた。

(※1) 『相中相高百年史』 (1998 (平成 10) 年 7 月 6 日発行) 「第三章 中村高女」より。

(※2) 中村出身。大正 13 (1924) 年卒。

(※3) 大正 12 年と印刷されているが、148 ページ「中村高女史」年表によると、創立は大正 10 年とある。

(※4) 大正 13 年と印刷されているが、148 ページ「中村高女史」年表によると、移転は大正 11 年とある。

(※5) 大正 13 年と印刷されているが、会員名簿の卒業年 (大正 13 年) が正しいとすると、大正 12 年であろう。

親ばなれの下宿 (※1)

第2回卒 菊地 キヨコ (※2)

私共の時代の先生は田中先生、やせていた菅野マシ先生、増尾 (※3) 先生、砂子田の斉藤ヨシ子先生がいらっしゃった。考えてみると学生時代は親達がフィリッピンに仕事に行っていたので、分家の菊地さんの家にあずかってもらっていた。そこで、旧中村第二小学校から続いて、中村町立実践女学校の生徒になったのだ。

町の小学校に通う日には雪が降ると、わらで作ったオソボを履いて行った。町の友達、私のオソボを炭の火鉢のまわりで乾かしてくれた。帰りにオソボが冷たくないよとの親切だった。よい友人に恵まれていたので、親から離れていても私は元気だった。(悪く言うとオテンバだったかと思う。)

大野村女子青年の人や、八幡村女子青年の人と、6・7人出場した中に、私も中村女子青年学校代表に選ばれた。本当は渡部ツネ (※4) さんが出場するわけでしたが、事情ができて代理として弁論大会に出た。橋本タマ子先生が、大変心配して下さって、先生といっしょに2・3日寄宿にとまって訓練を受けた。当時の前川校長先生に「聞いてる人を、じゃが芋だと思って話せ。」と言われたことが頭に残っている。入賞者は大野女子青年の人で椎木の村山産婆さんだったのを覚えている。

校庭でテニスの練習をしたのだが、コーチは学校のそばの伏見さんという洗濯屋さんだった。テニスについての失敗は、新地の大堀チヨ (※5) さんと仲良しだったので、新地に遊びに行き、帰りの車がなくなり、新地から駒ヶ嶺を通過して大野の小野まで歩いて帰ったことがあった。夜遅くなったので家人に心配をかけたこともあった。

学校を卒業してからすぐ、私の夫になる人がフィリッピンから迎えに来たので、それから3年間夫について外地で暮らした。

(※1) 『相中相高百年史』 〈1998(平成10)年7月6日発行〉「第三章 中村高女」より。

(※2) 大野出身。大正14(1925)年卒。

(※3) 増尾キヨ。

(※4) 新地出身。大正14(1925)年卒。

(※5) 大堀は旧姓、横山チヨ。新地出身。大正14(1925)年卒。

中禅寺湖の徒歩旅行 (※1)

第3回卒 杉本 キヨ (※2)

私達が入学した時は、町立実践女学校と呼ばれて居た。学科の先生方は科目に応じて第二小から先生がいらっしやっていた。

当時の服装は私が入学した時から着物は紺の生地になり、袴は同じ姥茶でした。縞柄よりも無地はあかぬけして居ったから、見た目も良く見えた。

私が入学する時まで、高等2年から編入試験があり、合格すると、いち早く2年に入る事が出来、その年は5人の人が2年生に入った。

1年生から入ると一つ身などの小さな物から始めますが、いきなり2年となると大人物で絹布物ばかりですから、初めなれない内は随分苦労した。細目がきまっまってそれを全部出さないと卒業できないから夜遅くまで縫物をして居た。

それでも休み時間の鐘になると、外に出てテニスをして遊んだものだ。それがとても楽しみなものだった。

その年研究科に進み東京からいらっしやった八木 (※3) 先生が担任になった。ことばの綺麗な先生でした。卒業してから東京で暮らした私は、先生のお陰でことばに困りませんでした。先生は棲上げ等の急所の指導の時は、5・6人のグループで指導していただいたので、わかり易くよく覚えた。

2年の時の修学旅行は日光・東京と2泊3日の旅だった。季節は11月で、初め夜行の汽車で日光に向かい、朝6時頃日光駅に着き、それから電車に乗り馬返しまで行った。着いたのは7時頃だったと思う。

お店に荷物を全部預け、弁当だけ持って山を登り始めた。山はだんだん登りが急になり七曲りですから、本当に大変なものだった。皆、中齒の履物でしたので今考えてみると良く登ったものだと思う。3時間位で中禅寺湖に行き、華厳の瀧を見物した。当時の瀧は水が一ぱい流れて雄大なものだった。

お昼まで下りないと、東照宮等見物が出来ないというので、弁当も食べずに山を降り始めた。

(※1) 『相中相高百年史』 〈1998(平成10)年7月6日発行〉「第三章 中村高女」より。

(※2) 旧姓 遠藤。中村出身。大正15(1926)年卒。

(※3) 八木知重。